論　文 ニダバ (*Nidaba*) 43(2014), 99-108

ロマンシュ語スルセルヴァ方言の助動詞の選択性

—フランス語とイタリア語の対照，並びにコーパス調査とアンケート調査を通して—

坂　口　友　弥

1. はじめに

本稿では、ロマンシュ語スルセルヴァ方言[1)]の自動詞の迂言法過去時制における助動詞HAVEとBEの選択性について考察を行う。この助動詞の選択はSplit Intransitivity[2)]と呼ばれ、自動詞の迂言形式によって過去において表れる助動詞が一つではなく、二つに分かれる現象を指す。理論的な枠組みとして、先行研究Sorace (2000) 及びLegendre (2007a)[3)]の助動詞の勾配Auxiliary Selection Hierarchy[4)]を参照する。研究資料に、ロマンシュ語で書かれた地方紙のアーカイブ並びに母語話者に行ったアンケート調査を用いた。その後、この二つの結果を対照し、ロマンシュ語のSplit Intransitivityの特徴を概観する。先行研究では、様々な言語においてASHの枠組みを用いた研究がなされているが[5)]、ロマンシュ語では研究がなされていない。したがって、ロマンシュ語と同じロマンス諸語に属するイタリア語並びにフランス語との対照を通して、ロマンシュ語のSplit Intransitivityに関する知見を深めることを念頭に置いた上で研究を進めた。

2. コーパスについて

本章では、コーパスを用いてロマンシュ語の助動詞の分布を考察する。2.1.では、Sorace (2000) 及び Legendre (2007a) における ASH の枠組みを概観する。2.2.では、地方紙 La Quotidianaを用いたコーパス調査の方法について述べる。2.3.では、コーパス調査の結果を見た後、その結果について考察を行う。

2.1. 先行研究

本節ではSorace (2000) 及びLegendre (2007a) を参照し、ASHの枠組みにおいてフランス語とイタリア語がどのような助動詞を成しているかについて見ていく。

Sorace (2000) 及びLegendre (2007a) では、母語話者[6)]の容認度を基準に自動詞を、以下表1に示すように、1) change of location、2) change of state、3) states、4) uncontrolled processes、5) controlled processesの五つの動詞のクラス[7)]に分類した。加えて、この五つの動詞のクラスをサブカテゴリー[8)]に細分した。その上で、動詞のクラスの一番上に位置するchange of

location は助動詞 BE を、一番下に位置する non-motional controlled processes は助動詞 HAVE を頻繁に取る core verbs とした。一方、core verbs 以外の周辺的な動詞を non-core verbs とした。core verbs は文に表れる副詞などのアスペクトに影響を受けず、一貫して助動詞 BE または助動詞 HAVE を選択する。それに対して、non-core verbs は文に表れる副詞などのアスペクトの影響を受けやすく、助動詞 BE と助動詞 HAVE の選択の揺れ[9]があるとした。さらに、Sorace (2000) は助動詞 BE から助動詞 HAVE に切り替わる境界を cut-off point[10] と呼んだ。この cut-off point は言語によって異なる。表 1 に示すように、フランス語では動詞 die[11]（死ぬ）と動詞 appear（現れる）の間が、イタリア語では動詞 wilt（枯れる）と worsen（悪化する）の間が cut-off point である。

動詞のクラス	サブカテゴリー	動詞	フランス語	イタリア語
1) change of location		arrive	BE	BE
		come	BE	BE
2) change of state	a) change of condition	die	BE	BE
	b) appearance	appear	BE/HAVE	BE
		disappear	BE/HAVE	BE
	c) indefinite change in a particular direction	go up	BE/HAVE	BE
		go down	BE/HAVE	BE
		wilt	HAVE	BE
		worsen	HAVE	BE/HAVE
3) states	a) continuation of pre-existing state	last	HAVE	BE/HAVE
	b) existence of state	be (location)	HAVE	BE
		exist	HAVE	BE/HAVE
		suffice	HAVE	BE
4) uncontrolled processes	a) emission	resound	HAVE	BE/HAVE
	b) involuntary actions	shiver	HAVE	BE/HAVE
	c) bodily functions	sweat	HAVE	HAVE
5) controlled processes	a) motional	swim	HAVE	BE/HAVE
	b) non-motional	work	HAVE	HAVE
		yell	HAVE	HAVE

表 1　助動詞の選択/フランス語・イタリア語

2.2. 方法

本節では、コーパスを用いた調査方法について述べる。ロマンシュ語の助動詞の分布について、地方紙 La Quotidiana[12]のアーカイブを用いて考察を行う。言語資料には、検索範囲を 1996/7/1 から 2012/10/31[13]までとした。検索事項は、ロマンシュ語スルセルヴァ方言の三人称単数男性形並びに女性形と自動詞の過去分詞の組み合わせに限定した。集計時には、助動詞 BE/HAVE のどちらかと共起している例文を抜き出し分析を行った。以上のように検索事項を限定した上で、出現しうるものすべてを調査した。

2.3. 結果と分析

本節では、コーパス調査で導かれた結果及び考察を述べる。以下表 2 に、ロマンシュ語の助動詞の分布をまとめる。インフォーマント別の詳細な結果については、別表 1 を参照。

別表 1 の横軸における匿名のインフォーマント A から T の括弧内は、各インフォーマントの生年を表す。

動詞のクラス	サブカテゴリー	動詞	ロマンシュ語
1) change of location		arrive	BE
		come	BE
2) change of state	a) change of condition	die	BE
	b) appearance	appear	BE
		disappear	BE
	c) indefinite change in a particular direction	go up	BE
		go down	BE
		wilt	BE
		worsen	BE
3) states	a) continuation of pre-existing state	last	HAVE
	b) existence of state	be (location)	BE
		exist	HAVE
		suffice	HAVE
4) uncontrolled processes	a) emission	resound	BE/HAVE
	b) involuntary actions	shiver	HAVE
	c) bodily functions	sweat	HAVE
5) controlled processes	a) motional	swim	BE
	b) non-motional	work	HAVE
		yell	HAVE

表 2　助動詞の分布/ロマンシュ語

コーパス調査の結果、ロマンシュ語では動詞 worsen（悪化する）と動詞 last（続く）の間がそれぞれ cut-off point であることが確認された。したがって、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の順に cut-off point の位置が高いことが分かった。三言語間の助動詞の分布の対照を行うと、ロマンシュ語の助動詞の分布はフランス語よりもイタリア語に多くの共通点が見いだされた。ロマンシュ語とフランス語の助動詞の一致を比較すると、完全な一致が 10、部分的な一致が 15 であった。次に、ロマンシュ語とイタリア語の助動詞の一致を比較すると、完全な一致が 13、部分的な一致が 18 であった。これにより、ロマンシュ語の助動詞に分布はイタリア語の助動詞の分布に様相が似ていることが覗える。加えて、ロマンシュ語では表 2 に示す cut-off point よりも下に位置している動詞 be (location, ～がある、～がいる）及び動詞 swim（泳ぐ）が助動詞 BE を取っているが、表 1 を参照するとイタリア語でも同様にこの二つの動詞は助動詞 BE を選択できることが確認される。この点でも、イタリア語とロマンシュ語の助動詞の選択は類似していると言える。

次に、ロマンシュ語内の助動詞の分布を見ると、動詞 resunar（鳴り響く）において唯一助動詞 HAVE と BE の選択性が確認された。この選択に影響を与えているのは、動詞の内在的な意味ではなく、副詞が持つ telicity[14)]が影響を及ぼしていると考えられる。以下に、動詞 resunar（鳴り響く）の例文を列挙する。

(1) La fin d'jamna han las orglas ellas baselgias da Zignau resunau treis dis.
the end of/week HAVE the organs in/the church of Zignau resounded three days
週末に三日間にわたって、教会のオルガンが響き渡っていた。

(2) Cu il davos tun ei resunaus, han ils auditurs sblatschau freneticamein.
when the last sound BE resounded HAVE the auditors applauded frenetically
バックミュージックが鳴り響いた時、観客は熱狂的に拍手をおくった。

(1)と(2)の文はどちらも動詞 resunar (鳴り響く) が用いられているが、(1)が助動詞 HAVE を選択し、(2)が助動詞 BE を選択している。動詞 resunar（鳴り響く）は、telic と atelic の副詞とどちらとも共起することができるため、telic と atelic の両方の telicity を持ち合わせていると言える。ここでは、内在する動詞の telicity ではなく、副詞が規定する telicity によって選択が分かれると考えられる。(1)では、treis dis（三日間）という副詞句により継続的な行為が表され atelic となり、助動詞 HAVE が用いられる。(2)では、副詞句 cu（～の時）により非継続的な行為が表され telic となり、助動詞 BE が用いられると考えられる。

3. アンケートについて

本章では、アンケート調査[15)]の手法を用いてロマンシュ語の Split Intransitivity を考察する。3.1.ではアンケート調査の方法について、3.2.ではアンケート用紙の形式について、3.3.ではアンケートの調査と考察について述べる。

3.1. 方法

本節では、アンケート調査の方法について述べる。本調査は、ポスタ・ルマンチャ Posta Rumantscha を使用して、インフォーマントにアンケートを配布した。ポスタ・ルマンチャは、ロマンシュ語を母語とする人々を中心に形成されたメーリングリストで、現在合計約 600 人の会員が登録している。このメーリングリストは、本ウェブサイトの管理人に一度メールを送信し、登録している会員全員にそのメールが転送されるシステムである。本稿ではこのメーリングリストを利用し、アンケートに答えてくれるインフォーマントを募った。その結果、計 20 件の有効なアンケートを収集した。

3.2. 形式

本節では、アンケート用紙の形式について述べる。アンケートの設問は 20 題を作成した。設問 20 題の内訳は、表 1 並びに表 2 に挙げた 19 の動詞に加え、動詞 resunar（鳴り響く）については、2.3.で示したように副詞に影響され atelic になると考えられる文(1)と、telic になると考えられる文(2)を設定した。これらの設問を作成する際に、ロマンシュ語の各方言

で出版されている地方紙である La Quotidiana を利用した。設問に用いる文章が非文にならないように、La Quotidiana から文章を抽出したものを用いた。抽出後、インフォーマントがアンケートに答えやすいように、意味に影響を与えない程度に文章を短縮した。その後、各設問の該当する助動詞と動詞の過去分詞の部分を空欄とした。

各設問につき助動詞 HAVE 並びに助動詞 BE について、1 から 4 までの容認の度合をインフォーマントがその中から一つ選択するという形式でアンケートを行った。1 は全く容認できない、2 は部分的に容認できる、3 は大部分が容認できる、4 は完全に容認できるとした。

アンケートはインフォーマントのプライバシーを考慮し、匿名で行われた。インフォーマントの情報を記入する欄として、出生地、現住所、生年月日、母語、使用可能言語、職業の項目を設けた。設問の終わりに、インフォーマントが任意にコメントを出来る欄を作成した。

集計時には、各設問につき全インフォーマントの容認度の合計から全インフォーマントの数を割って、平均値を出して容認度を測った。全く容認できない 1 と完全に容認できる 4 の総和を 2 で割ることによって求められる 2.5 を基準に、容認できるものと容認できないものに分けた。つまり、平均値が 2.5 未満であれば容認できないものとして、2.5 以上であれば容認できるものとした。

3.3. 結果と考察

本節では、アンケートの結果及び考察について述べる。アンケートの集計後、3.2.に示した集計方法によって、平均値が 2.5 以上になったものを容認できるものとした。[16]その結果、助動詞の分布は 2.3.のコーパス調査の表 2 と同様の結果となった。この結果から、助動詞の分布についてコーパス調査の結果とアンケート調査の結果が同様であると結論付けられる。

以下、動詞 resunar（鳴り響く）の助動詞の交替について考察する。2.3.において、動詞 resunar（鳴り響く）は telic と atelic の両方の telicity を動詞の意味的内在特性として持ち合わせていると考え、副詞の telicity によって助動詞の選択が決まると考えたが、実際はそのように単純に言い切ることが出来るのであろうか。それについて以下に考察した。

以下、2.3.の文(1)と文(2)に助動詞 BE/HAVE 並びにそれに付随する過去分詞の選択 [17]を加えた、文(3)と文(4)を列挙する。

(3) La fin d'jamna han/ein las orglas ellas baselgias da Zignau resunau/resunai treis dis.
the end of/week HAVE/*BE the organs in/the church of Zignau resounded three days
週末に三日間にわたって、教会のオルガンが響き渡っていた。

(4) Cu il davos tun ha/ei resunau/resunaus, han ils auditurs sblatschau freneticamein.

when the last sound HAVE/BE resounded HAVE the auditors applauded frenetically

バックミュージックが鳴り響いた時、観客は熱狂的に拍手をおくった。

アンケートの結果、(3)では助動詞 HAVE と共起する文の容認度が 3.5、助動詞 BE と共起する容認度が 1.65 という結果となった。(4)では、助動詞 HAVE と共起する文の容認度が 2.6、助動詞 BE 共起する容認度が 2.9 という結果となった。よって、(3)では助動詞 HAVE と共起するものが容認可能であり、(4)では助動詞 HAVE 並びに助動詞 BE と共起するどちらの文も容認可能であるという結果となった。(3)の文はコーパス調査の段階で副詞の treis dis（三日間）を伴い、文全体の意味特性が atelic として仮定された。実際のアンケート調査の結果でも助動詞 BE と共起する文の容認度は低く、助動詞 HAVE と共起する文の容認度が高くなるため、コーパス調査との大きな相違は見られなかった。しかしながら、(4)では 2.3.の仮説とは矛盾する。(4)は本来ならば副詞 cu（～の時）が atelic を規定するため、telic と結びつく助動詞 BE と共起している文は容認できないはずであるが、アンケート調査の結果助動詞 HAVE とともに助動詞 BE と共起している文も容認されるという結果となった。これは、インフォーマントが副詞 cu（～の時）を伴う節の主語 il davos tun（バックミュージック）が、動詞 resunar（鳴り響く）と結びつき、「バックミュージックが響いた時」という telic の解釈と、「バックミュージックが響いていた時」という atelic の解釈の二つに分かれ、前者の解釈によって助動詞 BE が、後者の解釈によって助動詞 HAVE が選択されたと考えられる。これによって、(4)では助動詞 HAVE と助動詞 BE のどちらにも共起可能であるという結果が導かれる。コーパス調査の段階において、(3)では助動詞 HAVE のみと共起し、(4)では助動詞 BE のみと共起することが観察された。しかしながら、アンケート調査後、(4)ではインフォーマントの解釈により助動詞 HAVE と BE の選択に二分されることが分かった。

4. 結論

本章では、コーパス調査とアンケート調査の結果から導かれた結論を述べる。本稿では、地方紙 La Quotidiana を用いてコーパス調査を行い、メーリングリストを用いてインフォーマントを募りアンケート調査を行った。その結果、ロマンシュ語の助動詞の分布は各々の動詞と共起する助動詞の合致の数という観点から、助動詞の分布はフランス語よりもイタリア語に類似しているということが分かった。加えて、ロマンシュ語の cut-off point の位置は、フランス語やイタリア語よりも低いところにあるということが観察された。最後に、動詞に内在する telicity が telic か atelic のどちらか一方に定まっていない場合、副詞やインフォーマントの解釈によって助動詞の交替が起こるということが結論付けられた。

5. 展望

本章では、今後研究を進めるための方針について述べる。本稿では、先行研究 Sorace (2000) 並びに Legendre (2007a) を参照した上で、自動詞における助動詞の分布を動詞に内在するアスペクトによる内的な要因と、副詞やインフォーマントの解釈による外的な要因に結びつけて考察した。しかしながら、本稿では telicity のみに焦点を当て考察したため、他のアスペクトによる要因を考慮していない。より深く助動詞の分布を見ていくためには、更なる理論の構築が必要である。具体的には、インフォーマントへの聞き込み調査によって動詞の内在するアスペクトを特定し、動詞のグループ分けを行うという方法である。これによって、既存の ASH のみに頼りすぎない理論の構築が可能である。

本稿の調査は、ロマンシュ語スルセルヴァ方言のみに対象言語を絞り行われた。本方言はスイスグラウビュンデン州の東部で話されている代表的なものである。もう一つの代表的な方言として、スイスグラウビュンデン州の西部で話されているヴァラーデル方言 Vallader が挙げられる。ロマンシュ語の助動詞の分布について知見を広げるためには、このヴァラーデル方言も調査する必要がある。さらに、ヴァラーデル方言の助動詞の分布を既存の他のロマンス語と対照することによって、ロマンス諸語内の助動詞の分布について理解を深めることができると考えている。

今回は、自動詞に限定して助動詞の分布を見たのであるが、ロマンシュ語スルセルヴァ方言[18]では自動詞のみならず、再帰動詞の過去においても Split Intransitivity が見られる。この現象ついて現在調査中であるが、既存する ASH によって分布することは難しいというのが現在までの印象である。Sorace and Cennamo (2007) が再帰動詞のイタリアの北部で話されているパドヴァ方言 Split Intransitivity について述べているが、現象の記述のみに留まり、詳細な分析には至っていない。

新しい理論の構築、ヴァラーデル方言の助動詞の分布の調査、自動詞から再帰動詞への研究対象範囲の拡張、以上三点を研究の方針として据えた上で、今後研究を進めていきたい。

注記

1) ロマンシュ語にはスルセルヴァ方言 Sursilvan の他に、スットセルヴァ方言 Sutsilvan、スルメイル方言 Surmiran、ヴァラーデル方言 Vallader、ピュテール方言 Puter がある。ここでは、この五つの方言の中で一番話者数の多い、スルセルヴァ方言を代表させ、ロマンシュ語とする。
2) 通言語的に見ると、すべての言語の迂言過去の用法において、助動詞の対立が見られるわけではない。スペイン語では haber (HAVE)、カタルーニャ語では haver (HAVE) 、ポルトガル語では ter (HAVE) となり、助動詞 HAVE のみをとる。助動詞の対立が見られる言語は、イタリア語 essere (BE) と avere (HAVE)、フランス語 être (BE) と avoir (HAVE)、ドイツ語 sein (BE) と haben (HAVE) などがある。
3) ASH は Sorace (2000) によって発案されたものであるが、本稿では Legendre (2007a) の枠組みを中心に用いる。Sorace (2000) では、自他交替が起こる動詞までも取り扱われているためである。ここでは、そのような動詞を排除する目的で、Legendre (2007a) の枠組みを適応する。
4) 以後、助動詞の勾配 Auxiliary Selection Hierarchy の略称である ASH とする。
5) 例えば、イタリア語、フランス語、オランダ語及びにドイツ語を対照させ ASH を発案した Sorace (2000)、フランス語及びにイタリア語をドイツ語と対照させた Bentley and Eythórsson (2003) や、ASH の枠組みを適応してイタリア語のパドヴァ方言を研究した Cennamo and Sorace (2007) やイタリア語とフランス語を対照させ ASH に加え最適理論を適用した Legendre (2007a)、中世スペイン語及び中世カタルーニャ語を取り扱った Mateu (2009) などが見られる。
6) ASH を発案した Sorace (2000) では、主にイタリア語、フランス語、ドイツ語、オランダ語の各言語の母語話者の容認度を参考にしている。
7) 動詞クラス及びサブカテゴリーの意味の詳細について、Sorace (2000) を参照。
8) 注 6 と同様。
9) 本稿の 3.4.の動詞 resunar（鳴り響く）の分析を参照。
10) Sorace (2004: 262) は cut-off point は言語によって異なるとしている。加えて、cut-off point は core verbs にはなく、non-core verbs にあるとしている。
11) 統一する便宜上、動詞を英語で示す。
12) ロマンシュ語を研究する上で、唯一利用可能な言語資料である。参考ウェブサイトを参照。
13) アーカイブの一番古い記事から、研究の開始までの期間である。
14) 本稿では、Sorace (2000) に従い、Tenny (1994:4) の telicity の定義を用いる。下記に示す delimitedness は telicity と同様の意味である。その定義は以下の通りである。
"Delimitedness refers to the property of an event's having a distinct, definite and inherent endpoint in time."
15) 本アンケートを作成するに際して、京都大学人間環境学研究科博士課程一年の大喜祐太氏のドイツ語の説明及び全体的なレイアウトを参考にした。加えて、チューリッヒ大学 Universität Zürich のロマンス語学部 Romanisches Seminar に所属する Matthias Grünert 氏にアンケートの文を校正して頂いた。最後に、スルセルヴァ方言話者の 20 人の匿名のインフォーマントの方々にアンケートの回答にご協力頂いた。この文章を以て、彼らへの謝辞としたい。
16) 各動詞の助動詞のインフォーマント別の容認度並びに平均値について、別表 1 を参照。
17) 容認できない助動詞にはアスタリスクを付した。
18) ロマンシュ語の中でも他の方言には見られない特異な現象であるため、敢えてロマンシュ語スルセルヴァ方言と記述した。詳細について、Strebel (2005) を参照。

参考文献

Arnovich, Raúl (2007) *Split Auxiliary Selection from a Cross-Linguistic Perspecitive.* Benjamins.

Bentley Delia and Eythósson Thórhullar (2003) *Auxiliary Selection and the Semantics of Unaccusativity.* Lingua 114.

Cennamo Michela and Sorace Antonella (2007) *Auxiliary Selection and Split Intransitivity in Paduan: Variation and Lexical- Aspectual Contsraints.* Split Auxiliary Systems. A Cross-Linguistic Perspective. ed. by Raúl Aranovich. Benjamins.

Furer, Jean-Jacques (2001) *Vocabulari Romontsch Sursilvan-Franzos.* Fundaziun Retoromana P. Flurin Maissen FRR. Glion.

Bowern, Claire (2008) *Linguistic Fieldwork: A Practical Guide.* Palgrave Macmillian. Hants.

Haiman John and Benincà Paola(1992) *The Rhaeto-Romance Languages.* Routledge. London.

Legendre, Géraldine(2007a) *On the Typology of Auxiliary Selection.* Lingua 117. 1522-1540. John Hopkins University. Elsevier B.V.

---------- (2007b) *Optimizing Auxiliary Selection in Romance.* Split Auxiliary Systems ed. by Aarnovich, Raúl. A Cross-Linguistic Perspective. Benjamins.

Loporcaro, Michele(2010) *Two Euroversals in a Global Perspective: Auxiliation and Alignment 1.* Walter de Gruyter.

---------- (2007) *On Triple Auxiliation in Romance. Linguistics 45-1.* Walter de Gruyter.

Mateu, Jaume (2009) *Gradience and Auxiliary Selection in Old Catalan and Old Spanish.* Oxford University Press.

Perlmutter, David M. (1978) *Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis.* 157-190. Proceeding of the 4th annual meeting of the Berkeley Linguistics Society.

Pulman, Stephen (1997) *Aspectual Shift as Type Coercion.* Transaction of the Philological Society 95.

Sorace, Antonella (2000) *Gradients in Auxiliary Selection with Intransitive Verbs.* Language volume 76-4. 859-890. University of Edinburgh.

---------- (2004) *Gradience at the Lexicon-Syntax Interface: Evidence from Auxiliary Selection and Implications for Unaccusativity.* The Unaccusativity Puzzle. Explorations of the Syntax-Lexicon Interface. ed. by Artemis Alexiadou, Elena Anagnostopoulou and Martin Everaert. Oxford University Press.

Spescha, Arnold (1989) *Grammatica Sursilvana.* Casa editura per mieds d'instrucziun.

Strebel, Barbara (2005) *Il Riflessivo in Soprasilvano: Indagine di Morfosintassi Sincronica e Diacronica.* Romanisches Seminar der Universität Zürich.

Tenny, Carol (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface.* Kluwer.

参考ウェブサイト

http://posta/giuru.ch/（ロマンシュ語話者によって形成されたメーリングリスト）

http://www.suedostschweiz.ch/（地方紙 La Quotidianna）

http://www.vocabularisursilvan.ch/（ドイツ語/ロマンシュ語スルセルヴァ方言辞書）

		A (1983)	B (1961)	C (1962)	D (1990)	E (1983)	F (1989)	G (1949)	H (1982)	I (1960)	J (1973)	K (1972)	L (1970)	M (1981)	N (1937)	O (1977)	P (1978)	Q (1960)	R (1984)	S (1967)	T (1982)	AVR
arrive	HAVE	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	BE	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
come	HAVE	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1.15
	BE	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	1	4	4	4	4	4	4	3.85
die	HAVE	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1.15
	BE	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
appear	HAVE	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1.15
	BE	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	1	4	4	4	4	4	2	3.75
disappear	HAVE	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	4	1.2
	BE	4	4	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	1	3.8
go up	HAVE	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1.15
	BE	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	1	4	4	4	4	4	4	3.85
go down	HAVE	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	BE	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
wilt	HAVE	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	2	3	1.3
	BE	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	1	4	4	4	4	4	3	3.8
worsen	HAVE	4	1	1	1	4	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	4	1.55
	BE	3	4	1	1	1	4	2	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	3	1	3.2
last	HAVE	1	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	1	4	4	4	4	4	4	3.7
	BE	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	2	1	1.2
be (location)	HAVE	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	BE	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
exist	HAVE	4	4	1	4	4	4	4	4	4	1	4	4	4	1	4	4	4	4	4	4	3.55
	BE	1	1	4	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	4	1	1	1	1	2	1	1.5
suffice	HAVE	4	4	1	1	4	4	4	4	4	4	4	4	1	4	4	4	4	4	4	1	3.4
	BE	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1	1.15
resound 1	HAVE	4	4	4	4	4	2	4	4	4	1	4	4	4	1	3	4	4	4	3	4	3.5
	BE	1	1	1	1	1	3	1	1	1	4	1	1	4	4	2	1	1	1	2	1	1.65
resound 2	HAVE	4	1	4	4	4	1	3	4	1	1	4	4	4	1	1	1	1	2	4	3	2.6
	BE	1	4	1	2	1	4	2	2	4	4	1	2	4	4	4	4	4	4	3	3	2.9
shiver	HAVE	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
	BE	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
sweat	HAVE	4	4	4	2	4	4	4	4	4	4	4	4	4	1	4	4	4	4	4	4	3.75
	BE	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1.3
swim	HAVE	1	2	1	1	4	1	3	2	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	2	3	1.65
	BE	4	4	4	4	1	4	4	4	4	4	4	4	4	1	4	4	4	4	4	4	3.7
work	HAVE	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	1	4	4	4	4	4	4	3.85
	BE	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1.15
yell	HAVE	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	1	4	4	4	4	4	4	3.85
	BE	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1.15

別表 1: ロマンシュ語/助動詞の選択アンケート結果